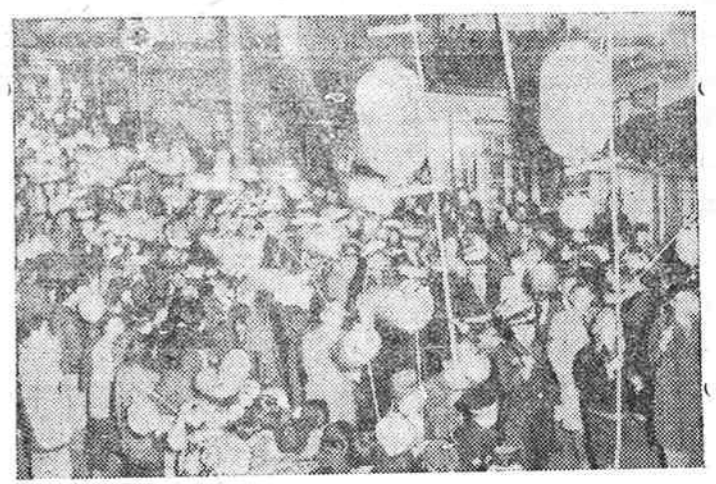


玄關に張られてあつたと記憶している。後に先生から直接伺うところによると、やはり新津の桂家の別荘だ。先生を僕がはじめて知つたのは東洋大学の講堂であつた。その日は東洋大学の講堂で桂湖村先生の老荘の講義があるというので、東洋哲學に志す若い人々一杯詰めかけた。そのうちに背丈こそは低いが、いやいやの横も細いが、音吐朗々たる先生が老荘思想を説きはじめた。比喩に富み實例を挙げるに上手の先生は、時々諸語をさへ交えて、學生をしてやんやといわしめたものだ。しかし僕が聞いてみると、その言葉つきや語調が葛塚辯そのまゝなのだ。僕はその時はもう相當の年輩となつていたので、さういふ見方も發達していたものと見え、其の日の先生の講義を終えて講堂から引き上げて行くのを追つかけて、失禮ですが先生は新潟縣の御出身ではありませんかと問うと、さうですと答える。北蒲原ではございせんかという又さうですと答える。葛塚町の御出身でしようかと問うと、それにもさうですと答えられ、どうして君は僕が葛塚町出身だということを知りましたかと反問すると、僕は正直に、先生のお言葉は全く葛塚辯の標本的ですからという、呵々大笑され

て、今夜僕の所へ來なさい大いに葛塚話をしましよといわれて別れた。僕は無遠慮にもその夜先生を訪ね、非常な接待を受け、それから時々訪問して大いに學問上の益を受けた。早稲田大學における先生の功績は大へんなもので、同大學に於ける漢籍に関する著作は多くは先生の手に成つたものだ。先生も極楽入りをしてからもう六七年になるよ。

僕がいま、歸國しようとする前夜には、それ等の人々が皆集つて送別會をやつてくれた。町制五十年祭の催のことなどももうやんと知つていて、皆が喜んでおられ、葛塚町の前途のために乾杯といつてもどぶろくやかすとりなどではなく、それはそれは芳香の高い甘い汁液であつた。してよくれたよ。歸りも又あの美しい車に乗つて、美しい貴婦人たちに送られて来たかといふかね。さあ、そこるところがばつさりしないのだよ。今からも思ひ出せないね。しきりに僕を呼ぶ聲がするので思はず眼をあけて見ると、妻が「先程からいたそう、喉り聲をお出しになりましたか」といふ。どうかなさいましたか。僕は娑婆へ歸つたのだね。



(提灯行列)

五十年の數字

石井耕一

町制施行は明治三十四年度の中途でしたから、はじめて一年間の決算ができたのは翌明治三十五年度です。この年の町の決算総額は一萬一千九百四十五圓五十錢七厘で、これに對し本年度の予算総額は三千九百九十四圓七千九百圓で、まさに二千六百七十圓といふものすごい飛躍ぶりです。

當時の吏員の報酬や給料を調べてみると、町長十六圓、助役十圓、収入役十四圓、書記は八圓の者一人、六圓の者二人、六圓の者二人、六圓の者二人、使丁は五圓となつていました。當時の人口は記録がないのでわかりませんが、正確な記録の最も古いのが大正六年

小林庄作さんの三人です。在職年数の長いのは故阿部良作さんの五期二十四年、生存者では水戸平作さんの六期二十二年三月です。

事務吏員で在職年数の長いのは現収役入代理の金子徹也さんで明治四十三年に附屬員という變な職名で就任してから四十年勤続しています。一年間の出勤日数は約三百日です。往復の道を一萬四千回通つたわけ、その延長約六萬キロメートル、北海道の根室から九州の鹿児島まで汽車で十往復したくらいの大巨離になります。

カットの町長職印は大正三年から使用したもので、その期間三十六年、勤務日數一萬八百日、一日に十回捺すとして十萬八千回捺したことになります。表彰状や感謝状、悲しい戦死通報から紛争事件裁決書と、あらゆる書類に捺し続けて今は捺どころか、文字も半ば磨滅しましたが、今なお日に數十回使用しています。

五十年といえは人の一生です。少々馬鹿らしいことですが、私どもの人生を數字で検討してみましよう。

日に三回の食事時間を一回十五分とすると五十年に一年六月二十二日四十五分間食べることになります。寝る時間

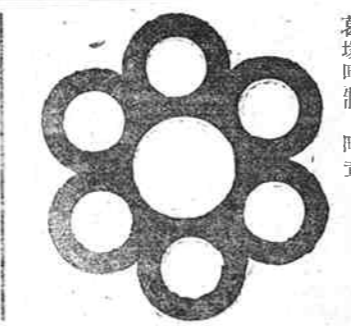
を日に八時間として十六年八月、くさい話で恐縮ですが、便所へ日に五分として二月二日八時五分間、乃木將軍の便所には書架が備えてあつたといひます。

時は分秒の休なく過ぎてゆきます。昔の人も時は金なりといひました。私どもは去つて再びかえらぬ時の中から、できるだけの勉強する時間、努力する時間、それに程よく反省する時間をとりたいものです。

そして各自が幸福な人生を送るとともに、私どもを育ててくれた郷土をこそ住みよ

町制の布かれる頃

渡邊冠



町制の改正により、葛塚太田古屋、嘉山の三村を合併せねばならぬこととなつたが、三村各々立場が違ひ。それに政治、財政、政黨運動も加わつて、容易ならぬ困難の問題であつた。

當時葛塚村は、昔の會所(現在の上下口三林家の屋敷)の跡(である)を役場とし、學識豊かな常木惣七氏(漢學の素養深く、政治に通じ、縣會議員にも當選して政界に乗り出していた)が村長となり、温厚な阿部康介氏(山二さん)を中心とする改進黨(後に憲政會、國民黨となつた)を背

くしたいと思ひます。五十年後の葛塚町には果してどんな興味ある數字があげられることでしょうか。

葛塚町制 町章

之に對抗して自由黨(後の政友會)は小川與次平氏(小川寛次氏先代)が中心となり、隠然たる勢力を持つていた。又水原から移つて來た吉田太吉氏(吉田光一氏先代)醫師の本多正雄氏等が自由黨の同志會を作り、村政の革新を目指して村治運動を展開して

然し合併問題については大した反對もなくある程度纏まつておつたと見られる。所が太田古屋村が合併に困難の事情下にあつた。當時役場は下黒山(現在空屋敷と稱する所)にあつて、長らく村長をして居た本間廣靜氏が縣會に出馬するため辭任して、城山の山田藤太氏が村長となり村政に當つていた。

その頃太田古屋方面では、村民の七割位は山田、本間兩氏を中心とする自由黨に屬していた。随つて葛塚村と反對にこの自由黨の勢力下にあるといつてもいい位であつた。

村當局は「葛塚村は財政的に窮乏状態にある。滞納が多い、立場の異なる農村が商人の町と合併する事は徒らに負擔を重からしめるだけだ」との理由の下に合併を拒否する態度に出た。一方村當局を中心とする自由黨の中には「どうも合併するならば、新井郷

川の沿岸の須戸、佛傳等を始め、土地龜、三軒屋、鳥穴を含めた福瀨村を作るべきだ」との論を支持し、容易に合併出来さうもなかつた。これに對抗して合併論者が立てたのが、當時の葛塚小学校長であつて改進黨を率えていた林徹氏であつた。林氏は上黒山の廣川薫氏を參謀とし、葛塚村の阿部、常木兩氏と結び合併を主張した。廣川薫氏というのは、黒山での舊家で親戚と稱せられ、現在の上黒山彌藤次家の本家である。學識も深く、押しも強し、思慮も卓越して居た。後宮川と改稱、大望をいだいて朝鮮に渡り、彼地で生涯を終えた男である。林氏の智のうとなつて、村制革新を立看板に村當局に迫り、大局の見地より合併すべきであると主張して活動した。

村當局は飽迄合村に反對して譲らず、老いてはいたが、川崎達太郎氏を始め、佐久間與太郎、三林龜次、北澤平七等が當局の持論を支持して活動していた。

林派は又齋藤彌四郎、笹川良吉、坂井重太郎、中野氏等を先鋒にして、それに水戸平作氏(前町長)等林氏門下の少壯血氣の人達が手足となつて活動するなど、運動實に猛烈を極めた。

合併問題を繞つて兩派の對